

# 龍猷寺再建の伝承について

伊 藤 秀 真

## 序

京都府京丹後市網野町にある龍猷寺は、永平寺五世中興・宝慶寺二世義雲（一二五三—一三三三）によって開創されたという伝承がある。龍猷寺の草創期にまで遡れる資料は存在していないが、同寺の創建に関しては①「木津庄岡田龍猷寺略記」（以下「略記」。龍猷寺十七世団貞義孝へ\*—一八五六）筆、一八七九年加筆書写）、②「龍猷寺本堂上棟銘」（以下「上棟の覚書」。撰者・成立年不詳）、③「龍猷寺法堂額の縁起書」（以下「法堂額の縁起書」。龍猷寺二十一世大円玄宗へ\*—一九二九）筆、一九二五年成立）、④「龍猷寺調」（撰者・成立年不詳）、⑤「龍猷寺の

縁起書」（撰者・成立年不詳）の五本の資料がある<sup>①</sup>。この中の③から⑤の三本は、義雲が同寺を開いたと伝えている。一方、他の二本には、瑞雲漢嶺（生卒年不詳）が開關したとあり、義雲の名は登場しない。前稿「龍猷寺創建の伝承について」（『愛知学院大学禅研究所紀要』第五十号）では、元来、龍猷寺には「略記」かその原本が由緒として伝えられていたが、その後、これを基に義雲が龍猷寺を開創したという脚色がなされたのではないかと論じた。ところで、前稿では、離湖（京丹後市網野町小浜）に島（離山・蓬カ嶋）が湧出し、龍神が出現したという瑞相に伴い、この湖の島に龍猷寺が開創したという伝承について展開させた<sup>③</sup>。既出五本の資料には、前稿で取り上げた離湖

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

### 龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

における創建以降の記述があり、この中に「龍猷寺が廢寺となり現在地に移転するが、回祿や経年変化により廃れた。その度に、同寺が再建された」という伽藍の変遷が窺える。再建に関する記録には、創建時の瑞相を含んだ伝承とは異なり、丹後国（現在の京都府北部）の領主京極氏が龍猷寺と関わっていたという逸話がある。京極氏が離湖にあった龍猷寺を衰退させたことや、同氏が智源寺（宮津市京街道）を興したことから、龍猷寺の末寺を智源寺の末寺に換えようとしたとも伝えられている。だが、近世に成立した資料であるから、これが史実であるか否か検討する必要がある。

本稿では、前稿で扱った五本の資料の創建以降に続く部分を通して、龍猷寺が再建した過程について取り上げる。この再建に関連する京極氏の伝承に対して考察し、更に龍猷寺の縁起が成立した経緯についても明らかにしていきたい。

### 離湖に創建された龍猷寺の衰退

この節では、京極氏が離湖にあった龍猷寺を衰退させた

という伝承を取り上げる。これは、前節で挙げた龍猷寺の創建に関する五本の資料の中に含まれている記録にあり、前稿に掲載した後に続く事象である。次頁の表は、内容毎に f から j の項目に区切り対校させたものである（a から e は前稿を参照<sup>4</sup>）。この項目に対して概要を示すならば、

- f. 寛永八年（一六三一）京極氏が一覽亭を建立
- g. 寛永十年（一六三三）京極氏によって廢寺へ
- h. 龍猷寺の末寺
- i. 本尊の移転
- j. 寛文五年（一六六五）京極氏の改易となる。

f と g には、京極氏が離湖に建立していた龍猷寺を廢したことが伝えられている。その時期について「法堂額の縁起書」は寛永八年<sup>5</sup>、「略記」と「上棟の覚書」は寛永十年となっている。

「法堂額の縁起書」には、京極氏が離湖の景勝を優愛し、ここに一覽亭が設けられた。これによって、龍猷寺は廢寺になったと記されている。一方、「略記」と「上棟の覚書」には、一覽亭という建物については触れていない。「上棟の覚書」には、京極氏が一覽して離山を気に入る、

f	g	h	i	j
<p>①略記</p>	<p>②上棟の寛書</p>	<p>③法堂額の縁起書</p>	<p>④龍猷寺調</p>	<p>⑤龍猷寺の縁起書</p>
<p>然ル処ニ、百拾代明正帝之寛永十癸酉年国守京極某甲之為ニ奪却廢寺セウル。</p>	<p>寛永拾癸酉年国守京極某一覽此山奇絶、故為舞樂地忽奪取、山林而殿堂仏具悉所廢鳴呼□勢不能、</p>	<p>寛永八年丁未、領主京極家湖山秀山ノ奇勝ヲ優愛シ、一覽亭ヲ設クルニ当リ、威ヲ以テるにより潜居云々、龍猷寺ヲ廢ス。</p>	<p>寛永八辛未年領主京極家湖山の奇絶を愛し一覽亭を設立するにより潜居云々、</p>	<p>然ルニ寛永八年未ノ歳、領主京極丹後守、湖山ノ奇□ヲ愛シ、一覽亭ヲ設立ニ依リ、為ニ適セラル此ノ時、他高国、領主ニ退言セシトテ、湖水ニシスメテ死セシム。</p>
<p>三十三<sup>トウヤ</sup>年、寛文五乙巳年ニ国守モ没落改易ス。</p>	<p>及黙循天而已雖然、寛文五乙巳年天亦廢国寺矣。</p>	<p>末寺三十八ヶ寺孩末寺十三ヶ寺 悉ク智源寺ニ附セラシ。或ハ他宗ニ改ム。</p>	<p>此時末寺三十八ヶ寺亦末寺十三ヶ寺あり、</p>	<p>寛文五乙巳ノ歳、領主モ没落改易ス。人アリ云フ、龍猷寺奪却廢寺後、三十三年前水死セシメシ、他ノ領主ノ嫡子高国ト生レアダヲナシタル也ト。</p>
		<p>依テ本尊聖觀世音菩薩ノ靈像ヲ守護シ暗夜ニ逃レテ木津ノ分郷岡田ノ奥、瀧ト地ニ潜居ス。</p>		
			<p>龍猷寺ハ、木津ノ分郷、岡田村ノ山奥瀧上ノ地ニ、本尊觀世音ヲ移転シ、潜居セシニ、</p>	

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

舞楽地とするため奪い取り、山林、殿堂、仏具を棄て、寺院としての機能が保てなくなった、と「略記」よりも廃寺になった経緯について詳しい。「龍猷寺調」と「龍猷寺の縁起書」には、「法堂額の縁起書」と同様の表現が含まれているが、廃寺の時期については掴めない。

h には、f に記録されている三本に共通して、龍猷寺には元々、末寺が三十八ヶ寺と更に十三ヶ寺あったと伝えられている。この末寺については、後節で論じたい。

「法堂額の縁起書」と「龍猷寺の縁起書」の i には、ほぼ同じ内容の記述がある。それは、龍猷寺が木津の分郷岡田村の山奥にある瀧（上）という地に本尊の観世音菩薩像を移転して潜居した、とある。この場所は、龍猷寺の南南東七百メートル程のところにある「竜王不動滝」と称される滝の付近のことであろう。「龍猷寺調」では、本尊が移転したことには触れていないが、f に「潜居云々」とあることから、この部分は省略されたと推察される。

そして、「略記」と「上棟の覚書」、「龍猷寺の縁起書」の j において、寛文五年に国守の改易があったことが記されている。「上棟の覚書」にある「天亦廢国寺矣」の「国

寺」は、「国守」の誤りである。この改易については、後節で述べることにしたい。

f から j を対校することで、この部分も概ね延慶二年（二三〇九）に漢嶺が龍猷寺を創建したと伝える「略記」と「上棟の覚書」の二本と、義雲が龍猷寺を開創したと伝える三本の二系統に分けられる。但し、「龍猷寺の縁起書」は、j の箇所を通して「略記」を踏まえて記述されたと考えられることについても留意したい。

龍猷寺と京極氏について

龍猷寺の南東約二十三キロメートルのところ、智源寺がある。『丹哥府志』巻之二によるとこの寺は元来、朱光庵と称されていたが、寛永二年（一六二五）に丹後国宮津藩主京極高広（一五九九―一六七七）が、母の追善供養のために伽藍を建立した。以降、母の戒名「惣持院殿松溪智源大禪定尼」に由来した山号（松溪山）と寺名に改めている。

ところで、前節では、離湖に創建された龍猷寺が、丹後国主の京極氏によって廃寺となった伝承の記録について取り上げた。この京極氏の系譜は、鎌倉時代の武将氏信（一

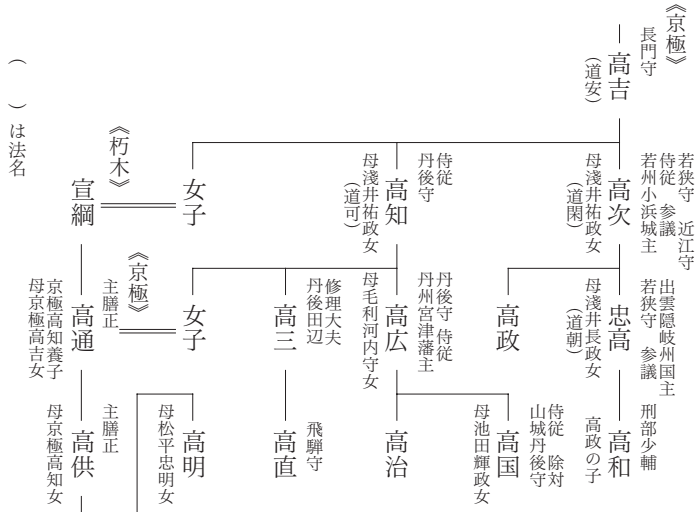


図 近世京極氏の略系譜 (抜粋)

二二〇―一二九五)を起源とし、満信―宗氏―高氏―高秀―高詮―高光と次第する。『尊卑分脈』は高光(一三七五―一四一三)までにとどまるが、高光の没後百五十年以上後に長門守高吉(一五〇四―一五八一)の子高知(一五七二―一六二二)。丹後宮津藩初代藩主、高知の子高広(同二代藩主)、そして高広の子高国(一六一六―一六七六。同三代藩主)の三名が丹後国主となった。高吉以降の系譜は、『近世京極氏の略系譜』に図示した<sup>12)</sup>。この節では、龍猷寺を廃したとされる京極氏について考察したい。

まず、龍猷寺が廃寺になった時期に着目すると、「略記」と「上棟の覚書」は寛永十年、「法堂額の縁起書」(と「龍猷寺調」)は寛永八年である。「龍猷寺の縁起書」も寛永八年の条に記されているが、j(寛文五年)に、「廃寺後、三十三年前に水死セシメシ」という一節がある。寛文五年の三十三年前は、寛永十年である。寛永八年、寛永十年の何れにしても、龍猷寺を廃寺にさせた人物は前述した三名のうち高知は既に没しているので高広か高国に限られる。承応三年(一六五四)、高広は目を患ったため、所領を高国に譲ったという記録があることから、龍猷寺を廃寺

龍猷寺再建の伝承について(伊藤)

( ) は法名

### 龍猷寺再建の伝承について(伊藤)

にさせた当時の国主は高広ということになる。

だが、高広の改易は寛文五年ではなく、恐らく寛文六年(二六六六)であろう<sup>16)</sup>。また、「法堂額の縁起書」と「龍猷寺の縁起書」のhは、領主(高広)が龍猷寺の末寺(三十八ヶ寺と十三ヶ寺の計五十一ヶ寺)を智源寺の末寺に換えたと、ということが記されている。更に「法堂額の縁起書」は、他宗に改めた寺院があるという指摘がなされ、「龍猷寺の縁起書」には六ヶ寺が臨済宗に転じたと具体的に<sup>17)</sup>ある。高広の改易の時期に誤りがあることや、次節で展開させるが京極氏が行った政策や、龍猷寺とその末寺との関係には疑問が残る。

また、『丹哥府志』巻之五には寛文年間(一六六一—一六七三)の頃、高国が離湖の境内で獲ってはならない魚を食べたことに対して、住職が寛宥せよと迫った。すると、高国は怒りを発し、領主を拒む不恭の者として住職を捕えようとして伽藍を焚焼した、とある<sup>18)</sup>。この記述からは、龍猷寺を廃寺にさせた人物は高広ではなく高国ということになる。

このように、京極氏に関して龍猷寺の記録と他の資料を

較べてみると、内容が一貫していない。故に、離湖にあった龍猷寺を衰退させた人物を特定することは難しく、廃寺となった経緯については断定できないのである。

### 龍猷寺の末寺とされる寺院

「上棟の覚書」を除く龍猷寺に伝わる資料には、同寺の末寺について触れている。その位置を対校した表の上段に付けたアルファベットで示すと、「略記」はe(前稿)とo(次節)、「法堂額の縁起書」はh(次節)、「龍猷寺調」はhとs(次節)、「龍猷寺の縁起書」はhとoである。eとoは末寺の数が五ヶ寺、hは三十八ヶ寺とまた別に十三ヶ寺があったと伝えている。sには、支院が四ヶ寺あったと記されているが、この支院という表現は、ここでは末寺と同義とみても構わないであろう。

さて、「略記」が収録されている『取集古日記』には、「承応元壬辰年永平寺御開山四百年」という句ではじまる資料が収録されている。この資料には、次のように龍猷寺の末寺とされる寺院名が列記されている(傍線部は筆者による)。

承応元壬辰年永平寺御開山四百年御茶湯代指上候龍猷寺三拾八箇寺			
木津村	成就寺	下岡村	松泉寺
網野村	心月寺	浅茂川村	正徳院
嶋村	蓮華寺	三津村	広通寺
間人村	龍雲寺	平井村	雲松寺
鳥取村	長命寺	木橋村	大慶寺
丹波郷村	相光寺	莎村	常泉寺
安村	慶善寺	善王寺村	長福寺
郷村	明光寺	木津上ノ	薬王寺
吉沢村	雲龍寺	堤村	徳正院
舟木村	禪昌寺	黒部村	福昌寺
成願寺村	成願寺	野間村	延命寺
久住村	本光寺	三重村	万歳寺
中浜村	福聚院	竹野村	養国寺
右ハ三十八ヶ寺			

此外二

蔵福寺	修徳寺	龍広寺	地藏院	万福寺	久国寺	自慶庵
高禪寺	清源寺	万泉寺	常喜庵	瑠璃寺	長福寺	
右十三ヶ寺	龍猷寺亦末寺ナリ					

この資料の寺院数は、hの記述と一致している。三十

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

八ヶ寺には、寺院があつた村名も記されているが、その後  
に続く十三ヶ寺については寺名のみで所在地が不明で  
ある。<sup>19)</sup>

はじめに、三十八ヶ寺について取り上げる。この三十  
八ヶ寺は現在、龍猷寺末寺（一ヶ寺は廃寺）、智源寺末  
寺、臨済宗全性寺とその末寺、真言宗寺院の何れかに帰属  
する。

まず、龍猷寺末寺は成就寺、松泉寺、周泉寺、心月寺、  
正徳院の五ヶ寺で、これはeとoに記されている寺院数と  
同じである（傍線部）。

成就寺を除く四ヶ寺は、現存する龍猷寺の末寺である。  
それは、松泉寺と正徳院は石牛天梁（一六三八―一七一  
四、龍猷寺二世・永平寺三十七世）、周泉寺は蜜俊万保  
（\*一七四九、龍猷寺九世）、心月寺は聖州廓門（\*一  
七一一、龍猷寺五世）と龍猷寺の世代が各寺を開創させて  
いることから明らかである。この四ヶ寺は、「龍猷寺  
調一」のsの支院の数と一致する。

成就寺については、次節で対校する「上棟の覚書」1と  
rの部分に記述されている。現在は廃寺であるが、この部

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

分を通して成就寺も龍猷寺の末寺であったことが分かる。<sup>(20)</sup>

「丹後竹野郡木津村寺社御改帳」（龍猷寺文書、一六九二年成立）によると、成就寺は松本入道道梵地<sup>(21)</sup>を開基として、文安二年（一四四五）に春岳本性（生卒年不詳）を開山に迎えて造営されたことや、この「御改帳」が成立した頃は安養山成就寺と号し、春益（生卒年不詳）という人物が住職であったようである。<sup>(21)</sup>

次に、「龍猷寺の縁起書」のhには、この三十八ヶ寺の中に臨済宗へと転宗した寺が六ヶ寺あると示されている。

この六ヶ寺を調べると、それは、相光寺、常泉寺、全昌寺<sup>(22)</sup>（全性寺）、慶善寺（溪禪寺）、慶徳寺（慶徳院）、万休院である（カッコ内は現在、用いられている寺名）。この六ヶ寺以外にも、善王寺村の長福寺は現在、臨済宗に転じて三要寺と号している（波線部<sup>(23)</sup>）。『丹後国中郡誌稿』の全性寺の項には、

当郡内ニ末寺十一ヶ寺アリ、曰相光寺曰長安寺曰林光寺曰少林寺曰万休院曰安穩寺曰三要寺曰慶徳院曰禪定寺曰溪禪寺曰常泉寺、中山山ト称す又末庵二ヶ所アリ  
一ヲ霞谷庵ト号ス<sup>(23)</sup>

と全性寺の末寺が列記され、三十八ヶ寺中、三要寺を含めると六ヶ寺の寺名が認められる（波線部）。

その他、真言宗である明光寺と薬王寺（中性院）が、三十八ヶ寺の中に含まれている（破線部。カッコ内は現在、用いられている寺名<sup>(24)</sup>）。

三十八ヶ寺中、龍猷寺の末寺である五ヶ寺と臨済宗の六ヶ寺、それと真言宗の二ヶ寺の計十三ヶ寺を除いた二十五ヶ寺は、智源寺世代或いはその関係者が開創した智源寺の末寺である。

次に、三十八ヶ寺の後に列記されている十三ヶ寺について取り上げる。『網野町誌』には修徳寺以降の十二ヶ寺が記されていて、一ヶ寺欠落している。この町誌にはその一ヶ寺が龍猷寺のことであり、代表寺であるから含めなかったという指摘がなされているが、その一ヶ寺は蔵福寺である。龍広寺と自慶庵は廃寺<sup>(25)</sup>であり、嘗て建立していた場所や廃寺となった時期など確認することができない。それ以外にも、蔵福寺、高禪寺、常喜庵、瑠璃寺は廃寺であり、現存する寺院と較べて資料が乏しい。常喜庵と瑠璃寺は、今井左京（生卒年不詳）によって開創された、龍猷寺



の末寺であった可能性がある。<sup>(26)</sup>

十三ヶ寺中、廃寺である龍広寺と自慶庵、龍猷寺の末寺と考えられる常喜庵と瑠璃寺を除いた九ヶ寺は、智源寺世代或いはその関係者が開創した智源寺の末寺である。

ところで、承応元年（一六五二）八月の永平寺開山四百回忌の折、龍猷寺が計五十一ヶ寺を勧化して茶湯料を献納したことは、果たして史実なのであろうか。

先ず、真言宗寺院である明光寺と薬王寺には、曹洞宗から転宗したという記録がない。また、臨濟宗寺院には、京極高明（一六六〇—一七二六）によって曹洞宗から転じたという記録はあるが、換宗以前の龍猷寺との関係については詳らかではない。<sup>(27)</sup>更に、智源寺の末寺であっても、承応元年以降に開創した寺院が含まれていること等、承応元年以前に龍猷寺との関係が掴めない寺院が存在している。<sup>(28)</sup>

このようなことから、龍猷寺が茶湯料を献納したという資料が承応元年に成立したとは断定できない。また、龍猷寺がこの時に茶湯料を献納したとしても、五十一ヶ寺の末寺を抱えていたことに対しては疑問が残る。

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

### 現在地における再建

「法堂額の縁起書」と「龍猷寺の縁起書」は、龍猷寺が現在地に移転する前に一旦、本尊観世音菩薩像を木津岡田の地に移転したと伝えている。そして、同寺が現在地に移転した後については、五本の資料を通して度々再建がなされていたことが分かる。次頁の表は、五本の資料の中から龍猷寺が現在地に移転した以降の記録について、内容毎にkからtの項目に区切り、対校させたものである。この項目に対して概要を示すならば、

- k. 延宝二年（一六七四）秋、現在地に建立
- l. 天和三年（一六八三）、伝法開山尊海
- m. 貞享元年（一六八四）夏
- n. 貞享四年（一六八七）回祿
- o. 元禄五年（一六九二）再建
- p. 大授、本山より中興開基の称を授かる
- q. 歳月とともに衰微しているさま
- r. 宝曆四年（一七五四）諸堂大破、成就寺落成
- s. 安永三年（一七七四）豊安による再建

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

t. 創建以降の龍猷寺世代

となる。k、l、o、sには現在地に遷移後の再建に関する事象が含まれている。「略記」と「龍猷寺の縁起書」のoと「龍猷寺調」のsには、龍猷寺の末寺に関する記録が含まれている。また、「上棟の覚書」のlとrには、龍猷寺の塔頭成就寺に関する記述がある。末寺と成就寺については前節で取り上げたため、ここでは省略する。

kとlには、密雲大授（生卒年不詳<sup>29</sup>）が但州（現在の兵庫県北部）から来て、現在の地に龍猷寺を興したと伝えている。延宝二年に大授がこの地に来たことは、「略記」のみに記されている（「略記」以外の四本は、その九年後の

天和三年とある）。これらの記録には、月洲尊海（一六〇八一—一六八三、永平寺三十一世）が龍猷寺の伝法開山（「法堂額の縁起書」は開祖）であることについても触れている。mには、「略記」と「上棟の覚書」、「龍猷寺の縁起書」の三本に貞享元年の夏、龍猷寺で結制が勤修されたという記述がある。この時、尊海は前年に示寂しているため、結制を行ったのは尊海とは別の人物である。

nには、五本の資料に貞享四年、龍猷寺が回禄に遭ったと記されている。この時期について「略記」と「上棟の覚書」、「龍猷寺の縁起書」は春、「龍猷寺調」は三月とある。「法堂額の縁起書」は、火災に罹った季節は不明であるが

①略記	②上棟の覚書	③法堂額の縁起書	④龍猷寺調	⑤龍猷寺の縁起書
k 十年目、延宝二甲寅ノ秋、大授和尚但州ヨリ来リ、今之地ニ中興建立シ、 l 十年目、天和三癸亥年ニ永平寺三十世尊海禪師ヲ伝法開山ト請シ、相鎮連而、		其後、至天于天和三癸亥凡五十年、是時自但州大授和尚来臨機制変復廢易地而湖秀山龍猷寺号。当邑重興、是末寺成就寺存在頼因由者也。次登謁宗風ヲ振ヒ、面目ヲ一新ス。	天和三癸亥年、但馬ヨリ大授和尚来リ。旧時ヲ思ヒ、現状信の善男女と議して今の境に移シ、堂宇再興シ、大ニ海禪師を伝法開山に請シ以後	或ハ然ラン、天和三癸亥ノ大授和尚、但州ヨリ来リ。今マノ地ニ中興建立ト古記ニアルモ、実ハ十八年ヨリ当寺ノ再建ニ尽力アリシナ

奥書	t	s	r	q	p	o	n	m	
龍猷寺再建の伝承について(伊藤)	<p>〈註30〉</p> <p>安永三甲午夏、十一代万江和尚、今之大殿建立、並庫裡禪堂淨頭共ニ同世代ニ建改アリ。</p>	<p>安永三甲午夏、十一代万江和尚、今之大殿建立、並庫裡禪堂淨頭共ニ同世代ニ建改アリ。</p>	<p>安永三甲午夏、大殿再造宮。是実依十方三世諸仏菩薩。此界他方諸天神明擁護力者也。</p>	<p>宝曆四戊年、不肖進院諸堂大破、眼中敢不忍不口密、発造營修補志護念日夜片時無忘淨頭庫院蔵屋土蔵、並鎮寺社成就寺重興漸落成。</p>	<p>有時、訴官雖有因事難、寂後蒙本山嚴命為中興開基者也。自爾年月漸移柱根大傾頽。</p>	<p>有時、訴官雖有因事難、寂後蒙本山嚴命為中興開基者也。自爾年月漸移柱根大傾頽。</p>	<p>六年目、元禄五申ニ再建口繁榮シ、末寺五ヶ寺今ニアリ。小本寺ト称ス。</p>	<p>貞享四年口卯之春出火焼失ス。</p>	<p>貞享元甲子之夏結制アリ。</p>
	<p>〈註31〉</p>	<p>然ルニ図ラズモ、</p>	<p>及ビ安永三甲午、十一代万江和尚、第四回造宮ヲナシ、殿堂完備シ、以テ今日ニ至ル。</p>	<p>爾米屋移、物変リ、漸ク柱根朽廢スルニ、</p>	<p>爾米屋移、物変リ、漸ク柱根朽廢スルニ、</p>	<p>元禄五壬申年八月、第三回建造ヲナス。</p>	<p>貞享四年、火災ニ罹リ、全ク灰塵ニ歸ス。後七年ヲ経テ、元禄五壬申年八月、第三回建造ヲナス。</p>	<p>貞享四年、火災ニ罹リ、全ク灰塵ニ歸ス。後七年ヲ経テ、元禄五壬申年八月、第三回建造ヲナス。</p>	
	<p>〈註32〉</p>	<p>安永三申年八月十一代万江和尚、第四回造宮ヲナシ、殿堂完備シ、以テ今日ニ至ル。</p>	<p>安永三申年八月十一代万江和尚、第四回造宮ヲナシ、殿堂完備シ、以テ今日ニ至ル。</p>	<p>安永三申年八月十一代万江和尚、第四回造宮ヲナシ、殿堂完備シ、以テ今日ニ至ル。</p>	<p>安永三申年八月十一代万江和尚、第四回造宮ヲナシ、殿堂完備シ、以テ今日ニ至ル。</p>	<p>元禄五壬申年八月、第三回建造ヲナス。</p>	<p>貞享四年、火災ニ罹リ、全ク灰塵ニ歸ス。後七年ヲ経テ、元禄五壬申年八月、第三回建造ヲナス。</p>	<p>貞享四年、火災ニ罹リ、全ク灰塵ニ歸ス。後七年ヲ経テ、元禄五壬申年八月、第三回建造ヲナス。</p>	
		<p>安永三甲午夏、十一代万江和尚、今ノ大殿建立並ニ庫裡禪堂淨頭共ニ同世代也。</p>	<p>安永三甲午夏、十一代万江和尚、今ノ大殿建立並ニ庫裡禪堂淨頭共ニ同世代也。</p>	<p>安永三甲午夏、十一代万江和尚、今ノ大殿建立並ニ庫裡禪堂淨頭共ニ同世代也。</p>	<p>安永三甲午夏、十一代万江和尚、今ノ大殿建立並ニ庫裡禪堂淨頭共ニ同世代也。</p>	<p>元禄五申歲再建、末寺五ヶ寺アリ。</p>	<p>同四年丁卯ノ春、山之火焼失。</p>	<p>リ。永平寺三十一世尊海禪師ヲ伝法開山ニ請シ、相統連而、貞享元甲子夏結制、</p>	

龍猷寺再建の伝承について(伊藤)

「全く灰塵二掃ス」と、その様子を表している(「龍猷寺の縁起書」は、山火事による類焼であったという)。

oには、五本の資料に元禄五年、伽藍が再建されたことが伝えられている。「法堂額の縁起書」と「龍猷寺調」は、その時期がこの年の八月で、三度目の造立であるという。

pは「上棟の覚書」のみに記されていることである。この冒頭には、龍猷寺とその末寺が元々智源寺の末寺であったという智源寺の訴えに対することが述べられている。これは、『取集古日記』に収録されている松泉院に関する一件と内容が対応している。その後、享保十一年(二七二六)、永平寺三十九世承天則地(一六五五―一七四四、龍猷寺三世)により、大授は龍猷寺の中興開基であると追認されたことを表した一節がある。<sup>34)</sup>

qには、「上棟の覚書」と「法堂額の縁起書」、「龍猷寺調」において、元禄五年の再建後、年月が経過したために伽藍の柱根が朽ちたという表現がなされている。「上棟の覚書」には、宝暦四年に諸堂が大破したと記述されているが、次の再建に取り掛かる安永三年までの期間は八十二年に及ぶ。

rは「上棟の覚書」のみに記録されている。宝暦四年は、龍猷寺三世則地の示寂後にあたるが、当時、龍猷寺に入院していた人物は不明である。造営修築を発願し、浄頭・庫院・蔵屋・土蔵、成就寺を興して落成させた、とある。

sには五本の資料に安永三年、龍猷寺十一世万江豊安(生卒年不詳)によって伽藍が再建されたと記されている。「法堂額の縁起書」のみ、その時期が不明であるが、「略記」と「上棟の覚書」、「龍猷寺の縁起書」は夏、<sup>35)</sup>「龍猷寺調」は八月とある。

そして、tには、「法堂額の縁起書」と「龍猷寺調」の二本に、龍猷寺が離湖に創建されてから三十九代続いていると記されている。「法堂額の縁起書」には、更にその期間が六百五十年であると示されている。それは、建治二年(二二七六)に義雲が同寺を開闢し、大正十四年(一九二五)に龍猷寺二十一世玄宗がこの「縁起書」を筆録するに至るまでである。玄宗が二十一世であることから、世代以外に住職となった人物が十八師いたことになる。龍猷寺には、離湖に伽藍が建立されていた頃の住職であると考えられる六師の名が刻字された位牌がある。<sup>36)</sup>この六師を含めた

としても、それ以外の十二師については不明である。

### 寺縁起の成立について

これまでに、龍猷寺の由緒が記されている五本の資料を対校した。この中には、古記という資料が用いられて編集された資料がある。前稿では、「上棟の覚書」で古記が用いられていることについて取り上げた<sup>37)</sup>。

さて、本稿で扱った「龍猷寺の縁起書」の1には「大授和尚、但州ヨリ来リ。今マノ地ニ中興建立ト古記ニアルモ、」とあり、この資料も古記を参考にまとめられていることが分かる。大授が龍猷寺の再建に尽力したというこの一節は、「略記」のkの部分と表現が重なる。故に、古記という資料の存在は明らかではないが、前稿を踏まえる<sup>38)</sup>と、古記は「略記」かその原本に相当する資料と考えられる。即ち、「略記」は「上棟の覚書」、「龍猷寺の縁起書」よりも古い記述が含まれた資料であるといえるであろう。

この節では現在、龍猷寺に伝わる縁起が「略記」に始まると仮定して、同寺の縁起がどの様に形成されたのかを考察していきたい。

龍猷寺再建の伝承について(伊藤)

### ・「略記」と「上棟の覚書」

「略記」と「上棟の覚書」は、漢嶺が龍猷寺を開創したと伝えている資料である。この両資料に共通している部分が多いことは、本稿を通して言及できることである。

ところで、「略記」の末尾には、延慶四年、延宝寅年、安永五年、天保三年、安政六年という識語がある<sup>39)</sup>。「略記」は、一度にまとめられた資料ではなく、筆者はまず0までが識語の延宝寅年(延宝二年(一六七四))に記録された部分であり、その後、安永五年(一七七六)にsが加筆されたと考えている。その理由については、次に示すことにする。

まず、1における尊海の世代数の表記をみると、「略記」と「龍猷寺調」には「永平(寺)三十世尊海禅師」とある。一方、「龍猷寺の縁起書」には「永平三十一世尊海禅師」と世代数が異なる。「龍猷寺調」は、「法堂額の縁起書」を用いながらまとめられているという特徴が窺えるが、尊海の世代については「略記」を引いたものと思われる。「略記」に尊海が永平寺の三十世であると記されているのは、世代数を間違えて筆録された訳ではない。それ

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

は、永平寺では三十五世版橈晃全（一六二七—一六九三）が卍山道白（一六三六—一七一五）の協力により承陽庵の新仏壇や仏殿の位牌を改めるまで、徹通義介（一二一九—一三〇九）と義演（\*—一三二四）の位置付けが三代相論により曖昧になっていたことが関係している。<sup>41</sup>「略記」は十七世紀に晃全が行った「世代改」以前、延宝二年に著されたことから、尊海の世代数が三十世と表されているのではないかと思われる。

また、kの「上棟の覚書」には、大授が（訴えられた後）龍猷寺の中興開基であると記されているが、「略記」にはこの記述がない。このことも、「略記」が前述した松泉院の一件（元禄七年か）以前、延宝二年に著されたと考えられる一つの理由である。

そして、「上棟の覚書」のrの後半には「発造宮修補志」護念「日夜片時無忘、浄頭庫院蔵屋土蔵（中略）興漸落成」という一節がある。「略記」には、この部分とsにおける安永三年夏に大殿が建立されたことを合わせて「今之大殿建立、並庫裡禪堂浄頭共二同世代二建改アリ」とまとめられている。「略記」のsは、「上棟の覚書」を参

考にして、安永五年に補筆された部分ではなからうか。

・二系統の資料へ

「法堂額の縁起書」と「龍猷寺調」、「龍猷寺の縁起書」の三本は、共通している箇所が多い。筆者は、前項で取り上げた二本の資料が成立した後、この三本が遅れて成立したと考える。

例えば、三本の資料のfには京極氏が一覽亭を造営したという記述がある。これは、「上棟の覚書」のgにある「国守京極某一覽此山奇絶」と、京極氏が一覽したという表現に依って、後世、京極氏が造営した建物が一覽亭と名付けられたと指摘することができるであろう。

また、龍猷寺の末寺の数が嘗て三十八ヶ寺のほか、十三ヶ寺あったという記述は「略記」と「上棟の覚書」にはみられない。前節で論じた通り、この五十一ヶ寺は永平寺開山四百回忌に龍猷寺が茶湯料を献納したという資料に列記されている寺院数と同じである。つまり、この龍猷寺の末寺の記述は、龍猷寺が茶湯料を献納したという資料をもとに、後から増補された部分であろう。

このように、龍猷寺の縁起は（〇までの）「略記」以前に遡ることはできない。その後、「上棟の覚書」がこれを踏襲した。そして、義雲が同寺を創建したという伝承が含まれる三本は「略記」と「上棟の覚書」を用いながらも、龍猷寺の縁起の中で永平寺との関係を含めた内容に改変がなされたのではないかと推察される。

## 結

本稿では、離湖に創建された龍猷寺が廃してから現在地に再建するに至るまでの、京極氏と龍猷寺に関する伝承を中心に取り上げた。

離湖の龍猷寺を廃寺にさせた人物については、京極高広が高国であると考えられるが、京極氏が廃寺に関与していたのかは不明である。後の由緒の中には龍猷寺の末寺の数が計五十一ヶ寺に及び、この末寺を高広が智源寺の末寺に転換させようとしたと伝えているものがある。永平寺開山四百回忌の砌、龍猷寺が茶湯料を献納したという承応元年の資料に龍猷寺の末寺とされる五十一ヶ寺の寺名が列記されているが、この資料を参考にして龍猷寺の縁起の中に末

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

寺の記述が含まれるようになったと考えられる。なお、龍猷寺が五十一ヶ寺の末寺を抱えていたことや、この問題に高広が関与したのかは定かではない。<sup>(4)</sup>

ところで、龍猷寺は三世則地が在世中までの間に、現在地において二度、再建している。一度目は、延宝二年（略記「以外は天和三年」）であるが、その十三年後（略記「以外は四年後」）に回禄に遭った。そして、その五年後には再び造営したと伝えられている。

龍猷寺の世代は伝法開山尊海（永平寺三十一世）、二世天梁（同三十七世）、三世則地（同三十九世）と永平寺の世代が連続している。龍猷寺の世代に永平寺の世代が含まれる理由は、龍猷寺に各々が実際に入院したとも考えられるが、恐らくは同寺の再建に関与したからである。当時の龍猷寺の財政状況については不明であるが、永平寺の支援を伴って同寺が短い期間で再建された可能性がある。

龍猷寺の由緒には、永平寺との関係を強調させるために、後世、様々な伝承が含まれるようになった。その理由は、智源寺との本末関係に翻弄されたこと以外にも、同寺の再建事情が関わっているからではなからうか。

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

註

- (1) ①から⑤の順序は、必ずしも成立時期に従って付けられているとは限らない。④は京都府竹野郡役所編『丹後国竹野郡誌』（臨川書店、初版一九二五年）に記載されていることであるが、京都府立京都学・歴史館所蔵『丹後国竹野郡寺院明細帳』（一八八四年頃成立）に収録されている龍猷寺の由緒の項と一致している（簿冊番号二十・見出番号九）。
- (2) 拙稿「龍猷寺創建の伝承について」（『禅研究所紀要』五〇、二〇二二年）一三五―一四七頁。
- (3) 同右、一四一頁。
- (4) 同右、一三八―一三九頁。
- (5) 「法堂額の縁起書」には、寛永八年に対して十干が丁となっているが、未の誤りである。
- 「龍猷寺調」は、「法堂額の縁起書」の影響を受けて成立した資料であると考えられる。「龍猷寺調」には寛永八年に龍猷寺が廃寺になったとは記されていないが、fに「潜居云々」という記述がある。これは、「法堂額の縁起書」の廃寺、移転に関する部分が省略されていると推察される。
- (6) 「龍猷寺の縁起書」のj「奪却廃寺」は、「略記」のgの句が用いられている。ここでは具体的に提示しないが「龍猷寺の縁起書」は、それ以外にも「略記」の句を引いている部分がある。
- (7) 長浜宇平編『丹後史料叢書』第六輯（名著出版、一九七二年）九七頁。
- (8) 毛利秀頼（二五四―一五九三）の娘。
- (9) 註(7)を参照。
- (10) 黒板勝美・国史大系編修会編『新訂増補国史大系』尊卑分脈三（吉川弘文館）、四三〇―四三四頁。
- (11) 高光から高吉までの系譜について、『姓氏家系大辞典』には、持光―持重―政光―高清―高明（峰）―高広（高秀）―高吉（太田亮『姓氏家系大辞典』第二卷（国民社、一九四三年）一九六九a―c）、『新訂寛政重修諸家譜』には、持高―※持清―勝秀―※政光―※政経―※高清―高峯―高秀―高吉（堀田正敦等編『新訂寛政重修諸家譜』第七（続群書類従完成会、一九六五年）一六五―一六七頁）と諸説ある。※持清は高光の三男、政光は持清の二男、政経は持清の三男、高吉は勝秀の嫡男であるという。
- (12) 太田前掲著書、一九六九c・一九七一a―c、堀田等前掲編書、一七五―一七七・一八五―一八六頁。
- (13) 註(5)を参照。
- (14) 寛永八年の条にも、水死に関する記述がある。但し、水死した人物が、誰であるのか判然としない。
- (15) 峰山郷土史編集委員編『峰山郷土史』上巻（峰山町、一九六三年）一七一頁。
- (16) 『新訂寛政重修諸家譜』第七、一七六頁。「寛文六年高国



が無道を愁訴せしかば、高国罪蒙りて所領を没収せらるゝに  
より——とある。

(17) 「龍猷寺調」には、龍猷寺末寺の寺院数のみが記されて  
いる。

(18) 長浜宇平編『丹後史料叢書』第七輯（名著出版、一九七  
二年）三六一—三六二頁。

離湖の項に「湖の広さ四五丁四方、湖の心に島山あり、島  
山の上に寺の跡なりとて礎石残る、今木津の庄岡田村にある  
湖秀山龍猷寺の旧跡なり。寛文の頃京極丹後守高国爰に来り  
網を湖中に入れ獲る所の魚を以て之を寺の境内に屠り以て肴  
とす、住僧顧て其扈従の者に告て曰、殺生禁断の処に於て唯  
魚をとるのみならず内に入りて之を屠り以て肴とする甚しか  
らずや固より僧の悪む所なれば請これを寛宥せよ、高国其言  
を聞て怒を発し曰、領主の所為僧徒これを拒む不恭の者免す  
べからず、將にこれを捕へんとす、住僧幸に遁れて木津に匿  
る、於是高国悉く其伽藍を焚焼す、今湖の海底に沈みて石燈  
籠などの見ゆるは蓋其時のものなりといふ、高国此寺を焚焼  
してよりいまだ幾何ならずして家の亡ぶるに至る、其故如何  
なるを明かに知らざれど此業を以て推而可知也。」とある。

(19) 龍猷寺の末寺とされる寺院については、京都府立京都  
学・歴史館所蔵『寺院明細帳』（簿冊番号・十八・与謝郡、  
十九・中郡、二十・竹野郡）、京都府竹野郡役所前掲編書、  
京都府丹後国中郡役所編『丹後国中郡誌稿』（臨川書店、一

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

九一四年初版）、京都府与謝郡役所編『与謝郡誌』上（京都  
府与謝郡役所、一九二三年）、網野町誌編さん委員会編『網  
野町誌』下巻（網野町役場、一九九六年）、中江光之助・吉  
岡武夫・小谷達雄・村上博中・米田久左衛門・井上利光編  
『丹後町史』（丹後町、一九七六年）、竹野郡弥栄町編『弥栄  
町史』（弥栄町役場、一九七〇年）、峰山郷土史編集委員会編  
『峰山郷土史』下巻（峰山町、一九六四年）、大宮町誌編纂委  
員会編『大宮町誌』（大宮町役場、一九八二年）、岩滝町役場  
編『岩滝町誌』（岩滝町役場、一九七〇年）の地誌等を参考  
にした。

(20) 「上棟の覚書」の1には、天和三年に大授が龍猷寺を興  
した。そして、その末寺には成就寺が備わっていた。また、  
同1には、宝暦四年に龍猷寺が経年により衰退したことから  
造営されるが、その際に成就寺が落成されたという。

(21) 京都府竹野郡役所前掲編書、三二五頁。「御改帳」の翻  
刻がなされている。ここでは、成就寺開基の姓松本の字が吉  
岡に改められている。

網野町誌編さん委員会前掲編書、一三四—一三五頁。『木  
津村誌』の年表から、松本梵智入道は松本正勝（\*1—15〇  
七）のことであると指摘されている。また、成就寺は龍猷寺  
の塔頭であったと記されている。

(22) 長福寺は現在、三要寺と号している。換宗以前の記録は  
少ないが、恐らく智源寺の末寺であると考えられる。なお、

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

弥栄町井辺にも長福寺と号す寺院があるが、この寺は久国寺と同じく福昌寺の末寺である。

(23) 京都府丹後国中郡役所編前掲編書、七六頁。峯山町誌稿の記述から抜粋した。

(24) 葉王寺が建立されていた上ノとは、明治期まで存在していた上野村のことである。

(25) 網野町誌編さん委員会前掲編書、一三二頁。

(26) 同右、一三五—一三七頁。

(27) 註(12)を参照。丹後峰山藩主は、初代高通（一六〇三—一六六六）、二代高供（一六二三—一六七四）、三代高明と次第する。高明は、高広の姪孫。臨濟宗の六ヶ寺が龍猷寺の末寺であったという記録はあるが、転宗以前の各寺の住職と、龍猷寺との関係は不明である。また、地誌によれば、各寺は

元禄八年（一六九五）に臨濟宗へと転じている。この転宗は、高明が御家督の際に改宗を頼んだとされる（峰山郷土史編集委員前掲編書、四九五頁・全性寺「臨濟宗に改宗」の項）。

(28) たとえば、青原寺の開山は毛山国文（\*—一八一—）であるが、それ以前にこの寺が龍猷寺と関係があったのか掴むことができない。

(29) 兵庫県豊岡市の長松寺七世であると言われているが、大授は同寺の世代に含まれていない（網野町誌編さん委員会前掲編書、一二九頁）。

(30) 「略記」の奥書には、次のような記述がある。

延慶四年ヨリ天保三壬辰ニ至リ五百二十五年ニナル、延宝寅年ヨリ今年ニ至リ六十年ニナリ一百五十壹年ニナル、安永五年<sup>マユ</sup>年ヨリ今ニ至リ五十九年ニナル、天保三壬辰正月誌焉、龍猷十四世代探考出者也。当安政六未ニ至リ二十八年ナル、

龍猷創立延慶二酉歳ヨリ明治十二年迄五百五拾年ニナル、此谷引□□□□天和三亥大授和尚建立ヨリ明治十二年迄百九十七年ニナル、

(31) 此地建立安永三年万江造立ヨリ明治十二年迄百六年ニナル、「上棟の覚書」の奥書には、次のような記述がある。冀次専祈。永劫法幢繁栄無難無災火盜潛消諸縁吉利者也。

上梁銘曰。

柱根堅列金剛杵。

梁棟横拈鉄棒頭。

龍猷梵宮湖秀水。

永防火火億千秋。

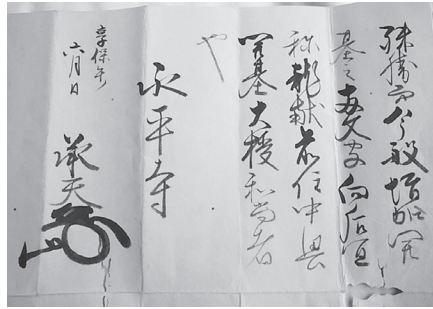
(32) 「法堂額の縁起書」の奥書には、次のような記述がある。

今日此ノ祝典ヲ挙グ。豈ニ意義ナシトセンヤ。本日、賀庭ニ列シ玉フノ賢士ハ、須ク往時ヲ追憶シテ祖先ノ尊仏護法ノ念ノ篤キ克ク、今日ノ隆昌ヲ致シタルヲ思ヒ、益々後代ノ孫孩ニ其ノ範ヲ垂レ玉フベキ者也。

(33) 松泉院は、龍猷寺末寺の松泉寺と同じ。本稿ではその内容を省略するが、智源寺が龍猷寺に対して帰属を求めている

た。『取集古日記』の中には、この時の書簡（書写）が収録されている。

(34) 則地は、大授に対して龍猷寺の中興開基であることを追認した。



承天証書（部分撮影）

(35) 「略記」と「龍猷寺の縁起書」は、ほぼ同文である。

(36) 龍猷寺には、上部に当山前住と刻字された位牌がある。

この下には、大伝安、通山宝、瑞雲嶺、孤山隣、栄室春、曜山旭の六師の名がある。瑞雲嶺は、瑞雲漢嶺のことで龍猷寺

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

を開創した人物である。曜山旭は曜山旭宝（生卒年不詳）で木津にあった薬王山瑠璃寺（廃寺）の開山であろう（網野町誌編さん委員会前掲編書、一三五頁）。

(37) 拙稿前掲論文、一四一頁。

(38) 龍猷寺の再建時期について「略記」には延宝二年、「龍猷寺の縁起書」は天和三年と異なっている。この違いが生じた経緯については不明である。

(39) 註(30)を参照。「略記」の識語には、延慶二年（一三〇九）、延宝二年（一六七四）、安永五年（一七七六）、天保三年（一八三三）、安政六年（一八五九）の五つの年を挙げている。延慶二年（一三〇九）は、漢嶺によって龍猷寺が開創された時期である。

(40) 『鷹峯出山和尚広録』卷第三十三「寄永平晃全禪師」陳者本山第三代祖位三百八十年來。摸稜両端無所適從。而聞今禪師快揮雄斷活手。直剪枝葉間論。遂以介和尚。為第三代。以演和尚。為第四代。新設位。〔曹洞宗全書〕語録二、六五〇a)

この「世代改」が行われた契機の一つは、「越前永平寺鐘銘」の、

住持第五代 比丘義雲銘記（『曹洞宗全書』金石分類、五三五b）

と義雲が自らを永平寺五世であるという刻字に依るところであろう。

龍猷寺再建の伝承について（伊藤）

（41） これと同時に、宝慶寺開山寂円（一二〇七？―一二一九？）は閏位の三世として永平寺の世代に含まれていた。

（42） 松泉院に関する一件（註（33）を参照）で、龍猷寺と智源寺の本末関係の問題が顕在化したことが関係している。